



- | | |
|---------------|--------------|
| □ 連携・協働を考える研修 | □ この感動を未来へ繋ぐ |
| □ 地域人材を生かす研修 | □ 家庭教育の学びに集う |
| □ スポーツ運動学に学ぶ | □ 地域創生ミニセミナー |

秋田県生涯学習センター(編集:社会教育アドバイザー)

市町村職員
専門研修
①

協議「連携・協働のキーワード」

生涯学習・社会教育関係の県内市町村職員の資質向上やネットワークの形成に向けた専門研修が、6月2日当センターで開催され27人が参加しました。

青森中央学院大学高橋興教授の講義や八峰町教育委員会千葉良一教育長の事例紹介は、多様な連携・協働の在り方などを改めて考え直す貴重な機会となりました。

研修を終えた男鹿市の武内春香さんは「八峰町千葉教育長さんの事例紹介や他市町村の情報など、本市の次の取組の参考になることが多かった」と話していました。

生涯学習・社会教育関係者研修

「地域人材の力を生かした社会教育施設の機能強化」をテーマにした公民館等職員の専門研修が、6月30日当センターで開催され37人が参加しました。

県立博物館高橋正副館長の講義やH28文部科学省優良公民館表彰館の五城目中央公民館と仙北公民館の取組紹介では、人材活用等のPDCAが具体的にイメージできるなど、実効性に富む有意義な研修となりました。

グループ別の意見交換では、各公民館の実践例や人材発掘のヒント、運営のポイントなどを共有できました。

人材活用のノウハウを探る

公民館等職員
専門研修
①

虹色企画

訪問インタビューシリーズ 第2回 秋田大学教育文化学部 佐藤 靖 教授

— ご自身のスポーツ歴について

高校まで体操競技を続けたが、大学では空中プレーでの身体コントロールが体操競技に似ていることからハンドボールに転向。今も、時々学生と一緒に汗を流している。

— 本県スポーツ事情に一言

秋田の子どもは身体能力が高いので、課題として重要性を増すのが指導者の資質向上。指導者自身が外に目を向けて刺激を求めると、その刺激を子どもに還元するための機会や環境の充実が必要。

— スポーツに汗する人たちに

今できることからまずやろう！何かのための手段としてのスポーツではなく、「動く感覚」自体を楽しむことを生活習慣化すべき。

生涯スポーツ考

スポーツ運動学の
大学研究室へ次代への継承
「身体知」スポーツへの思いを語る
佐藤 靖 教授

— 生涯スポーツへの思いは

人には、それぞれの運動経験から得た「身体知」(身体感覚)がある。

この個々人に存在する「身体知」から、万人に当てはまる「共通項」(コツやカンとして共感する感覚)を導き出して次代へ継承することが生涯スポーツに求められる。

子どもには、できないことができるようになる運動経験が必要だ。普遍化された「共通項」を大人と子どもと一緒に学びながら、「できる」経験を共有していこうとする生涯スポーツに期待したい。

大学から始めたハンドボールでインカレ2位。教授の汗する姿こそが、生涯スポーツの「共通項」と感じました。

秋田市内の全中学生7,200人以上が一堂に会する市中学校総体の総合開会式が、6月17日八橋陸上競技場で開催されました。

競技ユニフォームの各校選手団3,760人の入場行進では、市内吹奏楽部621人による演奏とスタンドの応援団2,800人以上の歓声とが相まって、競技場内の躍動感が最高潮に達しました。大きな感動の中で瞳を輝かせ



この感動を未来へ
秋田市中学校総体
総合開会式

る中学生の姿が印象的でした。

参加経験のある保護者は「この感動が、今でもスポーツを続ける私を支えている。感動は生き続けている」と話していました。

子どもは未来からの使者。生涯にわたって生き続けるこの感動を、未来へのメッセージとして、この子らに託したいものです。

6月24日は、秋田市八橋小の「みんなの登校日」でした。同校PTA主催の「あきた県庁出前講座」を利用した家庭教育講話会では、父母、祖父母など一緒に子育てに関わる保護者ら45人の参加がありました。

講話会は、「家庭教育の充実」に関して、「家族を笑顔にする10のヒント(県教委)」に沿った子どもの豊かな心を育てる話が中心で



家庭教育の学び
あきた県庁出前講座
八橋小PTA

した。特に、「語先後礼」の挨拶、体験や読書による知力の高まり、規範意識の育成、親子対話の在り方等については、具体的な場面を想定しながら考えを深めました。

参加した保護者からは「親であることの難しさや大切さについて、改めて考えるよい機会になった」との声が多数ありました。

地域創生 ミニセミナー

新しい時代の教育に向けた「次世代の学校・地域」創生プラン②

今回は、文部科学省策定の創生プランの方向性を確かめます。

「次世代の学校・地域」 創生プラン

次世代の学校創生

- 社会に開かれた教育課程の実現
- 次世代の学校創生に必要な必要不可欠な指導体制の質・量両面での充実
- 地域とともにある学校への転換



次世代の地域創生

- 次代の郷土をつくる人材の育成
- 学校を核としたまちづくり
- 地域で家庭を支援し、子育てできる環境づくり
- 学び合いを通じた社会的包摂

今回は、
具体的
施策で
す。

七色

＜余稚心^{ち しん}を去るを以て 士^{さむらい}の道に入る始めと存じ候なり＞。幕末の志士橋本左内が、数え15歳で自らの行動規範を記した『啓発録』の一節です。「稚心(甘え、わがまま)を去ることが士(大人)への第一歩である」とする一大決心をうかがい知ることができます。さすが幕末動乱期の俊英です。子どもが、大人社会へ入り込む時に覚悟すべきことを見事に言い得ています◆ある中学校の調査では、「朝、家の人に起こしてもらっている」と回答した生徒が、学年によっては50%超という結果が出ました。そして、この数値は小学校4年生程度によく見られる状況と聞いて驚きました。小4のまま中学生になっているという現実、大人扱いすべきところを子ども扱いしてきた大人の現実の裏返しでもあります◆自己中心の子どもと自子中心の親、親離れ子離れできるのにしない親子。この現実を左内はどう見るのでしょうか。多様な在り方や価値観が混在する中で、揺らぎに耐える現代社会に左内の檄を届けたいものです。